令和八年一月吉日初版作成

進化する 神人の知性

高嶋　善三郎

目　次

●人間神の子観に立った批判力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
●進化する神人の知性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
●私たち神人が目指すべき道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（付記）
●批判精神と悪口・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８

人間神の子観に立った批判力

『人類即神也の宣言文』の中にある「いかなる批判、非難、評価も下さず、それらに対して何ら一切関知せず」について、これらの言動行為は知性をもった者なら、これらの行為は、当たり前ではないかと思いますが、どのように受けとめていけばよいのでしょうかという質問がありました。この質問について、整理してみしょう。

その前に、知性、批判、非難、評価の意味を辞書（広辞苑）でみると。

知性とは、感覚によって得られた物事を認識・判断し、思考によって新しい認識を生み出す精神の働き。知的能力。

批判とは、物事に検討を加え、その正否や価値などを評価・判定すること。特に、物事の誤りや欠点を指摘し、否定的に評価・判定すること。

非難とは、相手の欠点や過失などを取り上げて責めること。

評価とは、品物の価格や人・事物などの価値を判断して決めること。また、その内容。

以上からみて、これらのワードは、人間の思考力、創造力をそれぞれの観点から具体的な精神的行為として現わしており、一つの意味合いを現わす言葉のグループといえます。

いかなる批判、非難、評価も下さずとは、主に二つの解釈が考えられます。

まず、一つ目は、何も批判、非難、評価もせず、無批判にただ受け入れるというものです。

もう一つは、批判、非難、評価もできるが、すべては人類即神也（神聖）顕わすプロセスであり、それらの現象に把われず、手放していけば、神聖を顕わしていけるという、真理にもとづいて、言葉や行為としてあえて指摘しない。

これらを考えていく上で、参考になるのが、『神への郷愁』「批判と悪口」における五井先生のお言葉です。

「宗教の道とは、ただ無批判になんでも善なりと観ることではない。宗教の道に入れば、入るほどハッキリした批判力が出てくるのであって、心が馬鹿のように無批判になるのではない。直感的批判力をはっきりもちながら、その批判力さえ消えてゆく姿と観じてゆくところに、はじめて空（くう）なる境地が展（ひら）けてきて、空即是色（くうそくぜいしき）といわれる、真実の世界がその人の世界となって来るのである。

人の悪口を言わぬことは勿論よいことだが、一切の批判力を失わせるような宗教を、私は是とするものではない。智と直感とが全く一つになってこそ、真実の世界が現われてくるのである。」

これから整理しますと、先に示した二つの解釈の内では、後者の解釈になります。しかし何も批判、非難、評価もしないのは、真理をはっきり把握することが前提になると言われているのです。

いかなる地球上の出来事、状況、ニュース、情報は、人類の誤てる想念（業想念）やこの地球を滅ぼそうとする想念が、地球を救済しようとしている守護の神霊団によってその９０パーセントが修正され、この世界に現わされて消えてゆこうとしている姿であり、あと１０％の業想念については、人類の代表である神人の私たち自身で真理につながり、本心の光の中に融合させ、光に還元し、修正しなければ、私たち自身の魂は磨かれず、業想念を新たにつくってしまうのです。守護の神霊がせっかく修正してくださったものまでも無駄にしてしまうことになるのです。

言い換えれば、今生の肉体的体験により得た分別心にもとづき、批判、非難、評価をしても、人類の真の救済にはならないということなのです。

これらのお言葉から、次のことが整理できます。

人間が肉体生活を長年営んでいるうちに、肉体がすべてと思い込んでしまい、肉体人間観になり、人間神の子観を棄ててしまった、その結果内に確固とした正しい直観的批判力を失い、肉体人間観に基づき批判することになり、かえって神に通じない想念行為(業想念)に新たなるエネルギーを注ぎこみ、また自分自身がその業想念の渦の中に巻き込まれ、それを厚くすることになるといわれているのです。

そして、人間神の子観を思い出すことにより、内に確固とした正しい直観的批判力を取り戻し、「地球上に生ずるいかなる天変地変、環境汚染、飢餓、病気や世界中で繰り広げられる戦争、民族紛争、宗教対立など、不調和な現象は、これらすべて『人類即神也』を顕わすためのプロセスなり」という観方ができ、それらに対して何ら一切関知せず、ただひたすら人類に対して、神の無限なる愛と赦しと慈しみを与え続け、人類すべてが真理に目覚めるその時に至るまで、人類一人一人に代わって「人類即神也」の印を組みつづけるだけでよいといわれているのです。

そうすれば、それらの不調和な業想念は自然と浄まっていくのだといわれているのです。

進化する神人の知性

神人の知性がどのように磨かれてきたか、五井先生のお歌『永遠の光』に言及されています。

（一）

自然に開く花のごと
時きてめざむ神ごころ
祈りの道は深けれど
やがていのちの泉を得む

（二）

ひとそれぞれの性のまま
めざすは高き神の庭
導き給うみ使いは
天にも地にもおわすなり

（三）

己が心の和を保ち
ひとひとの幸ねがう身の
清らなひびき天地（あめつち）に
世界平和の道ひらく

（四）

きらめく星は空にあり
輝く知性人にあり
神のみ心地に受けて
永遠の光の花咲かす

この歌詞では、私達神人の知性が磨かれてきたプロセスを詩的に示されています。

先の広辞苑の解説にあわせて整理すると、神人の知性とは、神のみ心を地に受けて形成された精神的働きであると言えます。

肉体生活を通じて得た知識と智慧だけでなく、長い人類史上聖者や賢者によって究められた真理に基く精神的働きなのです。

聖者賢者によって究められた真理と、それにより磨かれてきた知性の進化のプロセスを具体的に要約すると、次のようになります。

「人間には、一つの本心と一つの意識がある。人間が吾れと思っている意識は、神から分け与えられた生命エネルギーを根源の力として発生した想念波動であり、本心は奥底にあって、神のみ心と一つになっている。

肉体人間としてこの世で生活している自己というのは、つねにこの想

念意識で渡っているのであり、本心そのものが表面上でているわけではない。そこで神のみ心と一つになっている本心と、肉体頭脳を駆け巡っている想念波動とが分離し、別々になっていることが多い。それは何故かというと、本心は神のみ心の微妙な響きの中で働いているので、肉体波動、物質波動、物質の波動の、粗い、遅鈍な生活の中で生まれた想念波動にとって、この本心と、粗雑な自己の波動とを一つに生活する、ということがむずかしいことになる。そのため、本心と、粗雑な自己の波動とが分離していることが多くなってしまい、神のみ心の大調和の姿を、この世において現わすことができにくくなっていた。

過去の聖者賢者の方々は、守護の神霊の加護を受け、生老病死を超えた境地、肉体という限定された想念意識を超越した、生命の本源に、本心そのものになった自己を見出し、その一つになって生きる、という、境地になったときに、初めて安心立命もでき、他の人にも永遠の生命のひびきを伝えることができるのだということを実践された。」

現在地球が次元上昇の時を迎え、地球全体の波動を高め、愛と大調和の世界を顕現していく上において、人類全体が神聖に目覚めるべき段階に来ているのです。

「地球人類の存在価値は、神のみ心のままに、大宇宙の運行に地球世界を調和させてゆくことにあるので、地球人類単独の運命などというものはない。従って個人の場合でも、地球人類を大調和させるための個人が存在を許されているので、その反対の道を行くものは、いずれ滅び去るのである。」

人類全体を神聖に目覚めさせる方法として、地球を守護する神々が結集され、救世の大光明を形成され、聖者になられた五井先生を通して「世界人類が平和でありますように」という祈り言を降ろされたのです。

今から約八十年前太平洋戦争後、敗戦により多くのものが破壊された日本において五井先生によって、「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の生き方を伝えられ、私たち神人は「人間というものは、どんな人でも、神の大生命の中で生かされており、神と離れた自分というものは真実の自分ではなく、消えてゆく姿であることを自覚し、常に神と自己とを離さずに、いつも神のみ心の中で生き続けてゆく、祈り一念の生活に取り組んできだ」のです。（『非常識　常識　超常識』）

そして五井先生がご帰神されて以降、昌美先生のご指導のもと、我即神也、人類即神也の印等が降ろされ、２００３年から宇宙究極の一筋の光を降ろすご神事を七年間取り組んだ結果、私達のチャクラが開かれ、

宇宙神から直接光を降ろすことができるようになり、神聖復活の印が降ろされた。以上のように知性を鍛えられてきた神人は、今日宇宙神の光を受けて、その中にこの地上界の人類の業想念を投げ入れ、光に還元することができ、この肉体界に愛と大調和の永遠の輝かしい地球霊文明を築きあげていく中心の力になっているのです。

そして次元上昇への輝かしい挑戦は、今まさにクライマックスを迎えようとしているのです。

私たち神人が目指すべき道

そのためには、私達神人は、どのように決意していくべきかを示されています。

「合気道の植芝盛平先生の無敵の姿はどこからくるかというと、神と一体になったところからくるのである。人間が神と一体になった瞬間から、その人には敵はなくなるのである。大調和の姿になるのである。それが合気道であり、世界平和の祈りなのである。それが日本の真の姿を現わす真の道なのである。

まず世界人類にさきがけて、日本人の一人一人が神との一体化を実現することこそ、日本の使命が達せられる唯一の道であり、ひいては世界人類を恒久平和の道に導き入れる道でもある。

この地球界においては、力というものは絶対に必要なものである。しかし、このカというものが、普通いわれる武力による力関係というように思われているうちは、世界人類の平和は実現でき得ないし、日本の使命も永久に達せられない。

神力を信じつづけてもし仮に地球人類が滅びるなら、それも神意によることなので、致し方ないではないか。どうせ、神から来た私達の生命なので、神のみ心のままでよいのではないか。神のみ心によって生かされているものであり、神のみ心のままでよいのではないか。神のみ心によって生かされているものであり、み心によらねば、肉体に存在することも、肉体を去ることも許されないものである。人間はそうしたわかりきったことをもう一度じっくり考え直さねばならない。

そうして、その真理をはっきり悟った人こそ生きるも死ぬるもない、永遠の生命を発現しつづけて生き続け得る、真の人間、神人になり得るのである。その日のためにこそ私達は、世界平和の祈り一念で生きることの大切なことを人類すべてに知らせようと活動しているのである。」

（『霊性の開発』）

このお言葉は、私達が日々の生活の中で心がひるむ時に思い出せば、

きっとあらゆる困難を乗り越えていく勇気と智慧を与えてくれることでしょう

（付記）

批判精神と悪口

悪口をいわぬ事を善しとするのは
ふつう一般誰しもの心であるが
人の悪口をいいつづける事によって
それで大いに人気を博している人もある。
そうかと思うと悪口と批判とを同一視し混同して
なんでもかでも他の人のいうことを
無批判に肯定しようとしている人もある。

たとえ口先で悪口をいってはいても
その心の中に悪の想いの少ない人というのは
その悪口が妙に親しみをさえ感じさせられるが
いまだ心のなかには諸々の不浄がありながらも
口先だけで人を褒めちぎってばかりいる人には
やはり空々しい感じを抱いてしまうもので
かえって近寄ってゆく気にはなれないものである。

人間というものは実に面白いものでして
口先ではよい事ばかりを言おうと考えて
声にでる言葉で良いことばかりいっていても
必ずしも想念がそれについてゆけるものではなく
これが逆に口先で悪口ばかりいっても
想念がいつでもきれいな人もあるわけで
だからこそ声に出ている言葉ばかりで
人を批判したり人格を評価したりしていると
だんだんと真実のものがわからなくなってくる。

人間の善し悪しや人格の高低というのは
その人の常日頃に抱いている想念と
自ずから行われている行為で判断されるべきであるが
普通の人ではこの判断が出来かねるものであるから
そこで直感的なものが必要になってくるのである。
その直感というものはどこからくるのかというと

心を常に常に澄み清まらせている所からくるもので
澄み清まらせる為にはどうしたらよいのかというと
それには寝ても覚めても神を思いつづけていることで
常に神のみ心の中に自己の想いを入れておくことである。
その誰にでも出来る一番易しい方法というのが
この私の説いている世界平和の祈りなのである。

これまでの宗教の欠点といえば
　ああしてはいけぬ！
　こうしていけぬ！
という戒律のようなことばかりを教えていて
いつの間にか神の子人間本来の生き方を
業想念の渦の中に引き下ろしてしまっていたのである。

一般に悪口をいってはいけぬということでも
これが批判と悪口と全く一つにしてしまって
なんでもかでも人の悪を一切見てはならぬとして
まず人間性の実相を観よというように説くので
あの人の行為はあれではいけないのではと
自分の心の深いところでは思っていながらも
せっかく直感しえた心を
自ずからの力で抑えてしまって・・・
無理にも相手の人の善いところばかりを観ようとして
いつしかかえって相手の悪い波に引き込まれてゆき
自らもその悪念波の渦の中にはいっていったりして
神なる自己を欺瞞して生きていくという
まことに悪しき習慣がついてしまうのである。

このような中途半端な生き方というのは
自己本来の大事なる直観力というのを
小さな我の想念で抑圧している状態なのであって
決して真実の宗教信仰者のとるべき態度ではない。

いつでも何処でも必要とあらば
つねに真人(神人)というものは
　悪と観えるもの
　善と観えるものの
その両面ともに自己の心にハッキリうつし出して

その悪と観える事柄も善と観える事柄をも
それさえもが全て消えてゆく姿なのであり
すべてが消えてゆく姿であると観ずる想い・・
その想いさえもが消えてゆくものであるとまで
直感できうる本心の座に住処（すみか）を置いているのである。

自分はごく普通人であり凡人なのだから
真人のような境地にはなれぬと思う人もあるだろうが
人間は誰でもが本来は真人であるのは事実であるから
そのように神なる自己を否定し拒否する想念などを
まずは消えてゆく姿と想いつづけることから
次第に本来の自己（本心）が開顕されてゆくのである。

よって宗教のあるべき道というのは・・
ただ無批判に何でも善なりと観ることでもないし
ただただ無防備になんでも受け入れるものでもない！
やはり宗教の道に深く広く分け入れば入るほど
ハッキリとした批判力が出てくるものであって
まるで心が馬鹿のように無批判になるものではない。

内に確固とした正しい直観的批判力をもちながらも
そうした批判力さえも消えてゆく姿と観じえて
いかなる自他の言動に対しても振り回されず
把われのない生き方をしてゆくところにこそ
はじめて宗教的にいう空なる境地が展（ひら）けてきて
自ずと空即是色の真実の世界というものが
その人自身の世界となってくるのである。

人の悪口をいわぬのは勿論よいことだが
一切の批判力までも失わせてしまうような
そのような愚かで盲従的な宗教の在り方というのを
この私の場合は決して是とするものではない！
信仰をする一人一人の人間の心の中において
人間性本来の智と直感とが全く一つになってこそ
この世にも真実の世界が現われてくるのである。
（『神への郷愁』から引用し故酒井博雄講師が編集作成されたもの）
　五井先生著の『神への郷愁』という本は、現在絶版中であり、ここに
掲載されたものは、とても貴重な解説というべきお言葉です。